

## 「石川さんの唄」

【五年】

福岡の夏祭りで、五、六年生が剣舞を踊っています。唄を歌っているのは石川寿さんです。石川さんは、歌いながら、お父さんを思い出していました。

(父さん、おれの唄をみんなが喜んでくれてるよ。)

今から三十年ぐらい前(昭和五十年)のことです。福岡小学校の子どもたちが、鹿踊・剣舞を踊るようになりました。その話を聞いた石川さんのお父さんは、とても喜びました。福岡の鹿踊・剣舞はしばらく前から若い踊り手がいなくて、あまり踊られなくなっていたのです。お父さんは、剣舞の歌い手でした。さっそく、保存会の仲間といっしょに小学校へ行き、子どもたちに唄を歌ってあげたり、踊りを教えたりするようになりました。

ところが、しばらくして、お父さんは病気になり、入院することになりました。剣舞の唄を歌えるのは、お父さんただ一人です。お父さんは、困っている子どもたちのために、唄をテープに録音してあげることになりました。子どもたちは、それから毎日、テープに合わせて一生懸命練習し、学芸会で踊りを発表できるまでになりました。しかし、お父さんの病気が重く、できあがった踊りを一度もみることもなしに、翌年なくなってしまいました。

福岡小学校の子どもたちが踊るようになって数年が過ぎると、保存会でも若い人たちを集めて踊りの練習を始めました。しかし、だれも剣舞の唄を歌える人はいませんでした。地域のお祭りでは、毎年、テープに合わせて剣舞が踊られました。鹿踊・剣舞が復活したのは、とてもうれしいことでしたが、テープの声を聞くとみんな悲しい気持ちになるのです。そして、ふるさとに三百年以上も伝えられてきた剣舞の唄をだれかが受けついでくれることを地域の人たちは願いました。

ある日のことです。石川さんは、保存会の人から、

「お父さんのあとをついで唄を歌ってくれないか」

と、たのまれました。

石川さんは困りました。お父さんの唄は子どものころから何度となく聞いて育ちましたが、自分で歌ってみたいと思ったことは一度もありませんでした。だいいち、剣舞を踊ってみたいと思ったことさえもなかったのです。  
(お父さんがいなくなったのに、どうやって歌を覚えたらいいのだろう。あるのはこのテープ一本だけ。三百年もの伝統がある剣舞の唄い手だ。自分なんかにはできるとは思えない・・・お断りしようか・・・)

そんな石川さんをみて、お母さんが一冊のノートを出してくれました。なくなったお父さんのものでした。そこには、お父さんが練習のために自分で書き記した唄の文句がびっしりと書かれていました。

石川さんは、一生懸命歌っていたお父さんの姿どうれしような顔でそれを聞く地域の人たちの姿を思い出しました。石川さんは心を決めました。

お父さんが残してくれたテープと一冊のノートをたよりに練習を開始しました。唄は難しくてなかなか覚えられません。それにノートは古くなっていて読めないところがたくさんありました。もうやめたいと思うことが何度もありました。でも、お父さんのテープで練習している保存会の人たちや小学校の子供たちを見てみると、やめることができませんでした。

「寿、次はお前ががんばる番だ。」

とお父さんが言ってるような気がするのです。石川さんは、お父さんがしたようにノートに唄の文句を書きながら覚えることにしました。何度も何度もテープを聞いて少しずつ唄の文句を覚えていったのです。

お父さんが亡くなって、十年以上がたちました。

今日は、初めて地域みんなに自分の唄を聞いてもらう日。お母さんがたんの奥から“もんつきとはかま”を出してくれました。それは、いつもお父さんが歌うときに着ていた着物でした。石川さんはそれを着て玄関を出しました。

(まだまだ父さんのように歌えないけれど、今日からは、おれがふるさとの宝を守っていくよ。見てくれよ、父さん。)



資料作成

仙台市立福岡小学校

協力

福岡鹿踊剣舞保存会



